

〈書評〉

大串尚代 著

『立ちどまらない少女たち——〈少女マンガ〉的想像力のゆくえ』

(松柏社、2021年)

小 林 夕 夏

本書は、1960年代から2000年頃までの日本の「少女マンガ」が、外国文学・文化の水脈を受け継いでいることを説き明かし、少女マンガの文化史的意義の再考と、それに隣接するサブカルチャーの重要性を改めて提示する一冊となっている。本書は大きく分けて二部構成となっており、アメリカをはじめとする海外文学が、いかにして日本の少女文化に浸透していったのかを見ていく第Ⅰ部と、少女マンガとは何か、ヒロインとしての「少女」が担う役割とは何かに加え、吉本ばなな作品やアメリカン・コミックスのワンダーウーマンについても広く取り上げる第Ⅱ部からなっている。著者の大串尚代は序章において、「文学的要素を取り込んだ少女マンガと、アメリカ文学の距離は、意外に近い」(8)と述べている。本書は、アメリカ文学研究者である著者の視点から、日本の代表的文化の一つでもある漫画を再度読み直すことで、少女マンガを新たな角度から考えるきっかけを読者に与えると同時に、日本の大衆文化の可能性に対する理解をさらに深める一冊といえよう。

第Ⅰ部「アメリカのおともだち——わたしたちのアメリカン・ガール」は、まず、20世紀初頭の日本では既に、翻訳文学や少女雑誌を通じた海外小説との触れ合いがあったことを示す。そして、1953年に連載が開始された手塚治虫の『リボンの騎士』を皮切りに、自由な想像の飛翔を可能にする「ここでは

ないどこか」、すなわち異世界（外国）という舞台設定が、第二次世界大戦後の少女マンガへと継承されていくことを示し、そこに映し出されたアメリカ文化によって、日本の少女文化が徐々に形成されていった経緯を振り返る。具体的には、外国への憧れを喚起すると同時に一少女としての親近感を感じさせる『すてきなコーラ』、南北戦争時代のアメリカを舞台に人種問題や自己実現の主題を扱った『ブロードウェイの星』、そして「七〇年代の少女マンガを代表する「アメリカン・ガール」(59)が登場する『キャンディ・キャンディ』などの作品が取り上げられる。その一方で本書は、『カリフォルニア物語』や『エイリアン通り』^{ストーリー}、『BANANA FISH』のように、華やかな外国のイメージとは異なるアメリカの影の部分を描いた作品にも焦点を当てることで、少女マンガにおける外国表象が、憧れや理想の対象であったのみならず、「日本では起こりそうもない出来事の疑似的な経験」(146)を提供するものとして機能していたことを示している。さらに、『カリフォルニア物語』にはバーネットの『小公女』、『BANANA FISH』にはヘミングウェイの「キリマンジャロの雪」や『海流の中の島々』が直接言及されており、文学とマンガが密接に結びついていることを改めて読者に提示する。

第Ⅱ部「エターナル・ガールズ——少女とマンガを考える」は、第Ⅰ部で見てきた「ここではないどこか」というテーマから一転して「いまここ」を描く作品を扱う。第5章では、主人公が過去の失恋やコンプレックスを乗り越える「プルルンコーヒーゼリー」、失恋を前向きに受け入れ、積極的な自己認識が行われる「薔薇とばらの日々」をはじめ、読者がマンガのキャラクターに自己を投影し、現実世界のロールモデルを見つけるほか、他者との関係を通し、ありのままの自分を受け入れる自己肯定を促すといった少女マンガの役割が説かれている。大串は少女マンガを「永遠に自分を肯定する他者を求めるジャンル」(156)であるとしたうえで、読者が自身を訪れるであろう「ハッピーエンド」に期待を膨らませ、それを先送りし続けることで幸福を追求していることを示し、そうした「永遠のオトメチック性」を読者に提供するのが少女マンガであると論じている。

ここまでは、少女マンガがいかに小説的要素を吸収して発展してきたかが議論の主軸となっていたが、第6章で著者は、小説家・吉本ばなの作品を、彼女が愛読してきたとされる大島弓子の漫画作品と比較して、両者に共通する(あえて曖昧に描くことにみられる)「少女マンガ性」に着目し、少女マンガ的な要素を組み込んだ小説に光を当てる。第7章は、アメリカン・コミックスに登

場するワンダーウーマンを取り上げ、日本におけるアメリカン・ガールと同様に、異邦人として位置づけられるキャラクターが第二次世界大戦当時のアメリカにおいて有していたフェミニズム・アイコンとしての存在意義や、今日のフェミニズム・ムーブメントにも継承されるキャラクター性を明らかにすることで、マンガが政治的な運動や変革から影響を受けると同時に、影響を与えうる存在でもあることを確認する。

あとがきにも記されているとおり、本書は「アメリカ文学と少女マンガ」というテーマに軸を置きながらも、「少女マンガとは何か」、「少女というヒロインが持ち合わせる力とは何か」という点についても広く論じており（238-39）、実際の漫画ページの画像やイラストも多く挿入されているため、少女マンガに馴染みのない読者も手に取りやすい工夫がなされている。加えて、これまで少女マンガに親しんできた愛好家たちにとっては、マンガから文学へと関心を広げるきっかけともなるだろう。本書のタイトルは、マンガ家・水野英子の助言によって再考されたことが記されている（242）。「立ちどまらない少女たち」というタイトルには、今後マンガ読解や批評がますます展開されていくにつれ、アカデミックな視点からの関心もさらに引き寄せるであろう、少女マンガの計り知れない奥深さが示唆されている。いかなるジャンルの文化作品であれ、そこに真摯な愛を注ぐ研究者がいるかぎり、その読解の可能性が立ちどまることはないのである。